

ネガティブ感情を伴うエピソードの会話が 会話の関係性の認知に及ぼす影響¹

—日常的に関係性の高い会話者の会話音声情報を対象として—

The influence of episodes of negative affect on estimation of relationship in interpersonal communication-cognition

高濱 祥子

愛知みずほ大学

Sachiko TAKAHAMA

Aichi Mizuho College

Abstract

Interpersonal communication-cognition is considered a social skill. When only speech information is available, how do people evaluate others' levels of intimacy and satisfaction with conversation? Here, I examined the inferential evaluation of intimacy and satisfaction with conversation derived from listening to others' conversations, without prior information about the speakers' relationship. Results showed that the scores regarding listeners' judgment of intimacy and satisfaction with conversations without emotional episodes were higher in an informal sentence end condition than in a formal sentence end condition. The intimacy scores were higher in conversations about negative episodes than in those about positive episodes, whereas there was no significant difference in the scores for satisfaction with conversations about positive and negative episodes. These results suggest that the mechanisms of relationship judgment are partly independent of the mechanisms of estimation of satisfaction with conversation.

キーワード: 会話満足度; 親密性; ポジティブ感情エピソード; ネガティブ感情エピソード.

Keyword: conversations about negative episodes; conversations about positive episodes; intimate conversation; interpersonal communication-cognition.

問題と目的

日常生活において、多くの時間や経験を共有する二

者間では、そうではない二者間と比較するとコミュニケーション量が多くなる。例えば、所属学科・研究室

¹ 本論文の一部は、日本心理学会第 83 回大会にて発表された。

や部活・サークル等が同じなどの関係性が高い大学生同士のコミュニケーション量が多くなるのに対し、所属学科・研究室や部活・サークル等が異なる大学生同士はコミュニケーションの機会そのものが少なくなる傾向にある。

またコミュニケーションは必ずしも行為者のみで行われるとは限らず、コミュニケーションの行為者以外の他者が存在する状況においても行われる。例えば、電車や教室等の多数の人がいる場所では、関係性の高い二者間の会話を、その場所に居合わせた他者は聴者として何気なく耳にすることがある。このように日常場面ではコミュニケーションの認知・評価を行為者である話者自身が行うこともあれば、その場に居合わせた他者である観察者または聴者がコミュニケーションを認知、評価することもある。さらに、我々はコミュニケーションの行為者であると同時に観察者でもあり、コミュニケーションを認知し、その情報をもとにして周囲の人間関係を理解している。

これまで、コミュニケーション認知を解明するために、会話の印象の規定因に関する研究が行われてきた。観察者が推定する会話の印象を左右する代表的なものに、コミュニケーションにおける立場、話題内容、先行情報、コードスイッチが挙げられる。

コミュニケーション認知において、行為者である話者と観察者（または聴者）では、利用可能な情報と情報処理、動機づけなどに大きな相違が生じることが知られている。例えば、話者も観察者（または聴者）もコミュニケーションを正確に判断しようという動機を持ちながら、その基盤には自己を高く評価したいという動機が存在する。その結果、話者は会話の活発さに関わらず対人コミュニケーションを高く判断するのに対し、視覚情報のみを手がかりに観察者は対人コミュニケーション評価が全体的に低いというように、コミュニケーションが活発であればポジティブに評価するという話者と観察者の間の親密性認知の非対称性がみられた (Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe, 1996; 木村・余語・大坊, 2005)。同様の結果は、視覚情報に音声情報を付加した会話材料の場合にも確認されている (木村・余語・大坊, 2010)。この現象は表出性ハロー効果と呼ばれ、関係性が未知の二者間のコミュニケーションが良好かどうかを判断するときに、活発なコミュニケーションほど良好であると推論されやすく、表出性を手がかりにした推論の精度は高い。

コミュニケーションの表出性に加え、話題内容自体も話者の親密性の認知に影響を及ぼす。木村・余語・大坊 (2005) は視覚情報を手がかりにした対人コミュニケーションの認知に焦点を当て、面識が全くないまたは顔を見たことがある者同士という関係性の二者間の会話を、話者と同性の実験参加者が評価することによって会話の印象の規定因を検討した。その結

果、面識のない二者間の会話映像を視聴後の評価者が推測した会話満足度は、ポジティブ感情エピソードのほうがネガティブ感情エピソードよりも高かった。その一方で、話者自身が評価した会話満足度には、話題内容の感情エピソードによる違いは認められなかった。加えて、木村 (2015) は、視覚情報と音声情報の両方を手がかりとし、友人関係にある二者間のコミュニケーションにおける親密性の推定について検討した。その結果、コミュニケーションの行為者である話者は観察者よりもコミュニケーションの良好性や親密性を高く認知すること、行為者自身の認知は表出性の影響を受けにくいこと、さらに観察者の認知は話者同士の関係性に関する先行情報の有無にかかわらずコミュニケーションの表出性の影響を受けることが示唆された。

また、日本語には方言と共通語、敬語が存在するように、状況に応じた言葉の使い分けが明確であることから、状況に応じて適切な言葉で話すかどうかは話し手の評価に影響する。例えば、状況や話題に応じて方言と共通語を適切にコードスイッチして使い分ける話し手は、対人印象と対人魅力を聴き手から高く評価される一方、不適切なコードスイッチを行う話し手は、対人印象と対人魅力を低く評価される (町・樋口・深田, 2006)。

以上のように、コミュニケーション認知に関する研究の多くは面識のないもしくは少ない二者、または日常場面で頻繁に生起する関係性の高い二者を対象として行われてきた。しかしながら、日常生活における自然発生的な会話は、関係性の高い二者間のほうがそうでない二者間よりも多い。従って、日常場面で聴者としてコミュニケーションを認知し、評価する場合、関係性が高いと推測される二者間の会話を対象とする機会は多いと推測される。感情の喚起を伴うエピソードを話題とする会話に対するコミュニケーションに焦点を当てると、面識のないまたは関係性が十分に構築されていない二者の会話では話をする者と聴く者という役割分担がなされるのに対し、十分に関係性が構築されている二者の会話では感情の喚起を伴う体験を共有している、感情の喚起を伴う体験の前後に関するヒューリスティックが働きやすくなる。それを受けて会話の表出性が異なり、会話を行う二者の関係性の認知にも影響があることが考えられる。

日常でのコミュニケーション認知のための情報は複数存在している。例えば、対面またはwebカメラなどの使用ように視覚的情報と音声情報の両方、電話による通話のように音声情報のみ、LINEなどのSNSを用いた発言やコメントに関する文字情報が用いられている。SNSの普及により、対人コミュニケーション認知における音声情報および文字情報といった言語情報の有用性が向上していることから、言語情報を手が

かりとした対人コミュニケーションの認知を明らかにすることは重要である。そこで本研究では、音声情報を手がかりとする対人コミュニケーション認知に焦点を当てた。

また、対人コミュニケーションにおいて、すべての人々が他者と同じ感情を共有するとは限らない。その一つの要因として情動伝染の個人差が挙げられる。Hatfield, Cacioppo, & Rapson (1992, 1994) によると、他者の経験している感情の影響を受けやすい人は、他者に対してよく注意を払っている、他者の感情の読み取りが得意であるなどの特徴をもっている。信頼性に関して議論の余地はあるものの、Doherty, (1997) は「情動伝染尺度 (The Emotional Contagion Scale; ECS)」を作成し、他者からの感情の影響の受けやすさを測定した。木村・余語・大坊 (2007) は ECS を邦訳し、日本語版情動伝染尺度作成して因子構造を検証したところ、「愛情伝染」、「怒り伝染」、「喜び伝染」、「悲しみ伝染」の4因子が確認された。「喜び伝染」のようなポジティブ感情の伝染は、精神的健康を促進していたのに対し、「怒り伝染」、「悲しみ伝染」のようなネガティブ感情の伝染は精神的健康を阻害していた。情動伝染は共感性の基盤であり (Hatfield *et al.*, 1992, 1994), 共感性自体はコミュニケーション認知に影響を及ぼすと考えられる。

以上より本研究では、日常的に関係性の高い二者に着目し、会話の文末表現と感情表出を伴う話題が聴者による会話満足度と関係性の推定に及ぼす影響を検討することを目的とした。まず、感情を喚起しないテーマについて、日常的に使用している文末による会話 (日常文末条件) と丁寧語の文末による会話 (丁寧文末条件) を設定し、会話の文末表現自体が会話満足度と関係性の推定に及ぼす影響を検討した。続いて、ポジティブ感情またはネガティブ感情の表出を伴うエピソードの会話における会話満足度と関係性の推定に及ぼす影響を検討した。また、聴者に対して日本語版情動伝染尺度への回答を求め、感情を伴うエピソードの会話に対するコミュニケーション認知の個人差をあわせて検討した。

方法

1. 実験参加者

実験参加者は、会話者、聴者で構成されていた。会話者は、日常的に親密な関係にある大学生 20 組 40 名 (男性 40 名, 平均年齢 19.88 歳, $SD=0.84$) であり、実験参加者の募集はペアを単位とした。聴者は大学生 78 名 (男性 40 名, 女性 38 名, 平均年齢 19.44 歳, $SD=1.14$) であった。実験参加者は書面にて同意を示した後に実験に参加した。なお、実験への参加は任意であり、途中で中止することもできると伝えた。

2. 会話条件

本研究では、文末条件と話題条件の2種類を設定した。文末条件では、会話において文末表現のみが異なり、会話者同士が最も時間や経験を共有している事柄を避け、感情を特に喚起しないであろうニュートラルなテーマとした。丁寧文末条件では、会話文の語尾を「です」「ます」のような丁寧語、日常文末条件では「だよね」のような日常会話通りの文末表現で話すよう話者に求めた。

一方、話題条件では2種類の話題内容を設定した。話題内容は話者同士が最も時間や経験を共有している事柄とし、ポジティブ感情エピソード条件では、お互いに喜びや幸福感を感じたエピソード、ネガティブ感情エピソード条件では、お互いに不安や悲しみ、苦痛を感じたエピソードを想起して、日常会話通りの文末表現で会話するよう会話者に求めた。観察者としての他者の存在がコミュニケーションに影響を及ぼすこと (山本, 2013) を防止するため、本研究では実験者を含め観察者が存在しない状況で話者が会話を行うこととした。

3. 質問紙

本研究では、実験参加者に対して以下の3つのカテゴリーの項目群を提示して回答するように求めた。具体的には以下のとおりである。

3.1. 会話相手との関係性 (木村ら, 2005) の質問項目

相手との関係性について、「① 全く知らなかった」、「② 顔を見たことはあった」、「③ あいさつしたことがあった」、「④ 世間話をしたことがあった」、「⑤ たびたび話をする機会があった」、「⑥ 頻繁に話をしている」、「⑦ 悩みごとの相談をしたことがある」、「⑧ その他」、から2人の関係に該当する選択肢を1つ選択するように求めた。会話者に対しては自らの関係性に対して、聴者に対しては会話刺激の話者の関係性を推定するよう求めた。

3.2. 会話満足度評定

木村ら (2005) による Bernieri, Gillis, Davis, & Grahe (1996) の主観的ラポール感に関する18項目尺度の質問文を会話満足度評定尺度とみなし、各項目に対して「まったくそうではない」を1点、「まったくそのとおりである」を8点とする尺度で評価するよう求めた。会話者に対しては自らの会話に対して、聴者に対しては会話刺激に対して評定するよう求めた。

3.3. 情動伝染尺度 (木村・余語・大坊, 2007)

15項目に対して「1: 決してない」から「4: いつもそのとおりである」の4件法で回答するよう求めた。これは得点が高いほど情動が伝染しやすいことを示している。

4. 手続き

4.1. 会話者による会話および質問紙回答

会話者ペアは幅 1 m の机を挟んで対面に着席し、会話相手との関係 (木村ら, 2005) の質問項目に回答した。次に、話者ペア同士で文末条件の会話、話題条件の会話のテーマを相談する時間を 5 分間設けた。実験中の会話は IC レコーダにて記録することを伝え、すべての会話は実験刺激として使用するため、個人が特定される可能性がある表現については可能な範囲で配慮するよう求めた。会話は、文末条件、話題条件の順序はすべての会話者ペアで固定とし、文末条件の丁寧文末条件と日常文末条件、話題条件のポジティブ感情エピソード条件とネガティブ感情エピソード条件の順序は会話者ペア間でカウンターバランスをとった。各会話条件が終了した時点で、自らの会話に対する会話満足度評定 (木村・余語・大坊, 2005) を行った。会話条件間隔は 2 分とした。

4.2. 実験者による会話刺激の選択

それぞれの会話について実際の会話時間を測定した。また、Bernieri *et al.* (1996) と木村ら (2005) を参考に、「表出性」を「会話中の行動の全般的な活発さを示す程度」と定義し、本研究では会話の音声のみを刺激として用いることを踏まえて「会話中の発言が活発であった」程度を個々の会話について 8 件法で 2 名の実験者が評価した。類似した会話時間および会話の表出性程度の評定が 7 以上の会話より、各会話条件 2 つずつ合計 8 つの会話 (3 分間) を聴者評価用の会話刺激として使用した。なお、各会話条件の会話刺激は、木村ら (2005) の会話相手との関係性が「⑥ 頻繁に話をしている」同士のペアと「⑦ 悩みごとの相談をしたことがある」同士のペアからそれぞれ 1 つずつ選択した。

4.3. 聴者による会話の印象評定および質問紙への回答

聴者は、4 つの会話条件について 2 つずつの会話 (3 分間) を聴き、会話満足度評定 (木村ら, 2005)、会話相手との関係性 (木村ら 2005) の推定を行った。会話刺激の提示順序は実験参加者間でカウンターバランスをとった。会話条件間は 1 分間隔とした。すべての会話の印象評定終了後、情動伝染尺度 (木村ら, 2007) への回答を求めた。

結果

1. 有効データ

本研究では、関係性の高いペアに着目して会話の評定を行うため、会話相手と高い関係性 (「⑥ 頻繁に話をしている」または「⑦ 悩み事の相談をしたことがある」) で一致した 16 ペア 32 名 (男性 32 名) を分析対象とし、関係性が不一致の 4 ペア 8 名は分析

対象から除外した。聴者は回答項目に不備があった 6 名のデータを除外し、72 名を分析対象とした。聴者の実験参加者については、質問紙の回 (男性 36 名、女性 36 名) を分析の対象とした。

2. 会話者による会話相手との関係性評価の操作チェック

会話者の実験参加者の会話相手との関係性 (木村ら, 2005) の質問項目への回答は、「⑤ たびたび話をする機会があった」2 名、「⑥ 頻繁に話をしている」29 名、「⑦ 悩みごとの相談をしたことがある」9 名であった。「① 全く知らなかった」、「② 顔を見たことはあった」、「③ あいさつしたことがあった」、「④ 世間話をしたことがあった」、「⑧ その他」は 0 名であった。「⑥ 頻繁に話をしている」または「⑦ 悩みごとの相談をしたことがある」で関係性評価が一致した会話者ペアは 80 % であった。

3. 実験者による会話の表出性評価と会話刺激の選択

すべての会話を対象に 2 名の実験者が会話の表出性程度の評価を行ったところ、条件ごとの平均評定 (*SD*) は、文末日常文末条件 7.43 (0.82)、文末丁寧文末条件 7.10 (0.80)、ポジティブ感情エピソード 7.25 (1.06)、ネガティブ感情エピソード 7.35 (1.06) であり、条件に関わらず全体的に表出性が高かった。2 名の実験者間の会話の表出性評定の一致率は、文末表現条件 80 %、話題条件 85 % であった。

4. 会話満足度への影響

Figure 1 は会話者自身が評価した会話満足度、Figure 2 は聴者が推定した会話満足度を示す。

4.1. 文末表現が会話満足度に及ぼす影響

会話者における文末条件の会話満足度について対応のある *t* 検定を行った結果、日常文末条件の会話満足度 ($M = 6.59, SD = 1.76$) は丁寧文末条件 ($M = 5.63, SD = 2.20$) よりも有意に高かった ($t(31) = 2.36, d = .49, p = .025$)。

聴者における文末条件の会話満足度について対応のある *t* 検定を行った結果、日常文末条件の会話満足度 ($M = 5.81, SD = 1.05$) は丁寧文末条件 ($M = 3.68, SD = 1.36$) よりも有意に高かった ($t(31) = 10.34, d = 1.75, p = .00$)。

4.2. 話題内容が会話満足度に及ぼす影響

会話者が評価した話題条件の会話満足度について対応のある *t* 検定を行った結果、ポジティブ感情エピソードの会話満足度 ($M = 6.94, SD = 1.46$) とネガティブ感情エピソード ($M = 6.41, SD = 2.03$) の差は有意とはならなかった ($t(31) = 1.95, d = .30, p = .06$)。

聴者が評価した話題条件の会話満足度について対応のある *t* 検定を行った結果、ポジティブ感情エピソードの会話満足度 ($M = 5.61, SD = 1.04$) とネガティ

ブ感情エピソード ($M = 65.42, SD = 1.17$) の差は有意とはならなかった ($t(71) = 1.53, d = .17, p = .13$)。

5. 関係性推定への影響

5.1. 会話の文末表現が関係性の推定に及ぼす影響

聴者が推定した文末表現における会話者の親密度は、日本文末条件では「⑥ 頻繁に話をしている」の関係性の推定が最も多かったのに対し、丁寧文末条件では「① 全く知らなかった」～「④ 世間話をしたことがあった」の関係性の推定がほぼ同数となっていた

(Table 1)。 χ^2 検定を行った結果、文末条件の違いは会話者の親密度の推定に有意に影響を及ぼしていた ($\chi^2(49) = 154.62, p = .00$)。

5.2. 会話の話題内容が関係性の推定に及ぼす影響

話題内容に基づいて聴者が会話者の親密度を推定すると、ポジティブ感情エピソード条件では「⑥ 頻繁に話をしている」の関係性の推定が最も多かったのに対し、ネガティブ感情エピソード条件では「⑦ 悩みごとの相談をしたことがある」の関係性の推定が最も

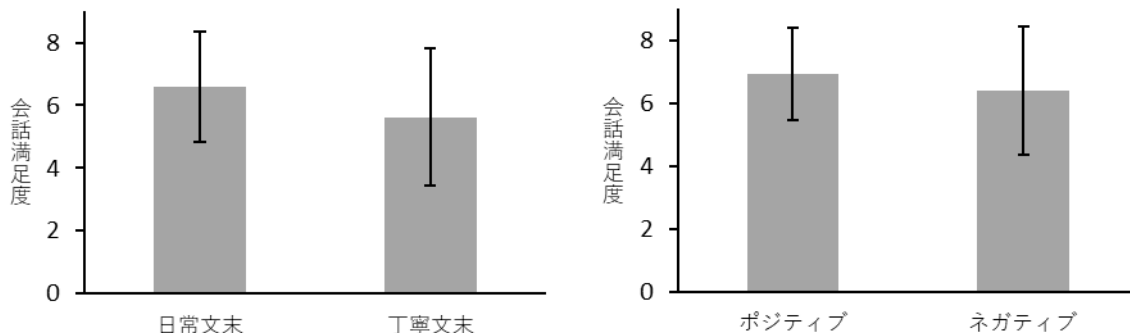


Figure 1 会話者が評定した会話満足度。エラーバーは標準偏差を示す。

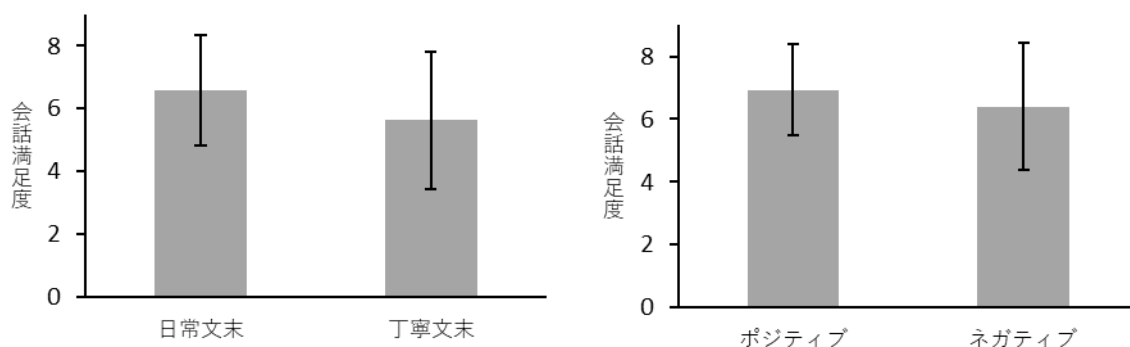


Figure 2 聴者が推測した会話満足度。エラーバーは標準偏差を示す。

Table 1 文末表現における聴者による関係性評価の推定。

関係性	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
日本文末	4	2	7	12	23	60	27	9	144
丁寧文末	25	24	30	24	25	5	0	11	144

① 全く知らなかった, ② 顔を見たことはあった, ③ あいさつしたことがあった, ④ 世間話をしたことがあった, ⑤ たびたび話をする機会があった, ⑥ 頻繁に話をしている, ⑦ 悩みごとの相談をしたことがある, ⑧ その他。

Table 2 話題条件における聴者による関係性評価の推定。

関係性	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	合計
ポジティブ	2	2	7	22	32	63	6	10	144
ネガティブ	2	5	7	19	17	14	70	10	144

① 全く知らなかった, ② 顔を見たことはあった, ③ あいさつしたことがあった, ④ 世間話をしたことがあった, ⑤ たび

たび話をする機会があった、⑥ 頻繁に話をしている、⑦ 悩みごとの相談をしたことがある、⑧ その他、多かった (Table 2)。 χ^2 検定を行った結果、文末条件は会話者の親密度の推定に有意に影響を及ぼしていた ($\chi^2(49) = 404.40, p = .00$)。

6. 会話満足度および関係性の推定に及ぼす個人差の影響

聴者の情動感染尺度の下位項目の平均得点 (*SD*) は、愛情伝染 2.78 (0.60)、怒り伝染 2.39 (1.02)、喜び伝染 3.10 (0.77)、悲しみ伝染 2.64 (0.74) であった。会話満足度および関係性の推定と情動伝染尺度の各項目間の相関係数は有意とはならなかった。

考察

本研究は、音声情報に基づくコミュニケーションの認知を取り上げ、文末表現と話題内容が会話満足度と関係性評価の推定に及ぼす影響を検討した。その結果、文末表現を操作した会話においては、聴者における会話満足度と関係性の推定が連動した傾向を示すのに対し、話題内容を操作した会話においては、聴者における会話満足度と関係性の推定は連動していないという結果が示された。具体的には以下のとおりである。

会話の文末表現に着目すると、会話者と聴者の両方で、丁寧文末条件よりも日常文末条件の会話満足度が高かった。また、聴者は日常文末条件の会話ほうが会話者同士の関係性を親密であると推定していた。従って、感情表出がニュートラルなエピソードであれば、会話者と聴者の両方における会話満足度および聴者による関係性の推定は、会話の文末表現と連動していることが示唆される。

本研究で使用した会話刺激の会話者の実際の関係性は、「頻繁に話をしている」または「悩みごとの相談をしたことがある」で一致していた。聴者が推測した関係性は、話題内容は感情を喚起しないニュートラルなエピソードで統一して文末表現を操作した場合、日常的に使用している通りの文末表現の会話に対しては「頻繁に話をしている」という回答が最も多かったことから、実際の話者の関係性を比較的正確に推測していると考えられる。一方で、丁寧な文末表現での会話に対しては、「あいさつをしたことがある」という回答が最も多いものの、「全く知らなかった」から「たびたび話をする機会があった」まで幅広く評価がなされたように、全体的に親密度を実際よりも低く評価していた。本研究において見出された文末表現による親密性推定の差異が適切なコードスイッチを行う話し手の印象が高く評価されること (町ら, 2006) と同様のメカニズムによるものかどうかは、今後を検討していく必要があると考えられる。

話題内容である感情エピソードが会話満足度に及ぼ

す影響は、会話者と聴者ともに感情エピソード間で違いが認められなかった一方、聴者による関係性の推測は、ネガティブ感情エピソードのほうが高かった。聴者にとっては、ネガティブ感情エピソードを話すほうが、ポジティブ感情エピソードを話すよりも自己開示が高いと判断された結果、より親密性であると推測されたことが示唆される。この結果は、ポジティブ感情エピソードの会話満足度のほうがネガティブ感情エピソードよりも高く推定されるという木村ら (2005) とは一致しない。もしかすると、木村 (2015) と同様、関係性が高い二者間の会話について、関係性情報が利用不可能、すなわちヒューリスティックが働かない状況において、本研究のように会話の表出性を高いレベルで統制するとネガティブ感情エピソードの会話満足度を高く推定するのかもしれない。

これまでの研究では、コミュニケーション認知を研究する際に、様々な会話刺激が用いられてきた。例えば、木村ら (2005) では面識がないまたは顔を見たことがあるだけという二者間の会話の視覚情報を会話刺激としたのに対し、本研究では日常的に関係性の高い二者間の音声情報を会話刺激として用いた。また木村 (2015) は視聴覚情報、本研究は聴覚情報のみで推測した点が異なる。実際の会話には、非言語情報である視覚情報と言語情報 (文字情報・音声情報) が含まれ、総合的判断としてコミュニケーション認知が行われている。今後は、利用可能な情報の種類が、会話満足度や関係性の推定に影響を及ぼしている可能性を詳細に検討していく必要があると考えられる。

引用文献

- Bernieri, J. F., Gillis, J. S., Davis, J. M., & Grahe, J. E. (1996). Dyad rapport and the accuracy of its judgment across situations: A lens model analysis *Journal of Personality and Social Psychology, 71*, 110 – 129.
- Doherty, R. W. (1997). The emotional contagion scale: A measure of individual differences. *Journal of Nonverbal Behavior, 21*, 131 – 154.
- Hatfield, E., Cacioppo, J., & Rapson, R. (1992). Primitive emotional contagion. In M. S. Clark (Ed.), *Review of Personality and Social Psychology*. Newbury Park, CA: Sage.
- Hatfield, E., Cacioppo, J., & Rapson, R. (1994). *Emotional Contagion*. New York: Cambridge University Press.
- 木村 昌紀 (2015). 対人コミュニケーションの観察に基づく親密性の推論 *心理学研究, 86*, 91 – 101.
- 木村 昌紀・余語 真夫・大坊 郁夫 (2005). 感情エピソードの会話場面における表出性ハロー効果の検

討 感情心理学研究, 12, 12 – 23.
木村 昌紀・余語 真夫・大坊 郁夫 (2007). 日本語版
情動伝染尺度 (the Emotional Contagion Scale)
の作成 対人社会心理学研究, 7, 31 – 39.
木村 昌紀・余語 真夫・大坊 郁夫 (2010). 社会的ス
キルとしての対人コミュニケーション認知メカニ
ズムの検討 社会心理学研究, 26, 13 – 24.
町 一誠・樋口 匡貴・深田 博己 (2006). 話者の方言
使用と印象：コードスイッチの適切さと聴者の出

身地による影響 社会心理学研究, 21, 173 – 186.
山本 恭子 (2013). 観察者の存在が二者間の感情コミ
ュニケーションに及ぼす影響—観察者との関係性
の観点から— 感情心理学研究, 21, 19 – 27.

利益相反

本論文に関して、開示すべき利益相反関連事項は
ない。